

Title	直接指示的指標表現の非トークン再帰性
Sub Title	Token-irreflexivity of direct referential indexicals
Author	星野, 嶽男(Hoshino, Takeo)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2000
Jtitle	哲學 No.105 (2000. 12) ,p.35- 53
JaLC DOI	
Abstract	Token-reflexivity is a notion introduced by H. Reichenbach to treat indexical expressions in his Fregean descriptive semantic system. Reichenbach claims that the semantical functions, such as reference and truth conditional import, depend on the properties of the uttered token itself. On the other hand, D. Kaplan constructed his own Theory of Direct Reference for indexical expressions, as revising Reichenbach's problematic ideas including token-reflexives, using some technical maneuver. Namely, Kaplan abstracted the notion of "token", which is originally extralinguistic entity, to the notion of "occurrence in a context", and brought it as a type into his own system. There seems to be a difference between Reichenbach's Theory of Token-Reflexives and Kaplan's Theory of Direct Reference: the former requires semantical conventions specific to the indexical expressions, and the latter inquires a comprehensive convention common to indexical and non-indexical expressions. Although Kaplan's type-oriented theory has been regarded as solving some serious problems implicated by Reichenbach's token-oriented theory, it is confronted with another problem with so-called "true demonstratives", which requires non-linguistic demonstration to fix the referent. Of course the token-oriented theories have also some difficulties as seen in the Reichenbach's or D.H. Mellor's. It seems to me that this problem shows a serious and ingrained dilemma between type-oriented semantical theory and token-oriented theory; between a pure semantical theory and a hybrid theory containing extra-linguistic entities in it.
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000105-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

— 投稿論文 —

直接指示的指標表現の 非トークン再帰性

— 星 野 嶽 男* —

Token-Irreflexivity of Direct Referential Indexicals

Takeo Hoshino

Token-reflexivity is a notion introduced by H. Reichenbach to treat indexical expressions in his Fregean descriptive semantic system. Reichenbach claims that the semantical functions, such as reference and truth conditional import, depend on the properties of the uttered token itself. On the other hand, D. Kaplan constructed his own Theory of Direct Reference for indexical expressions, as revising Reichenbach's problematic ideas including token-reflexives, using some technical maneuver. Namely, Kaplan abstracted the notion of "token", which is originally extra-linguistic entity, to the notion of "occurrence in a context", and brought it *as a type* into his own system. There seems to be a difference between Reichenbach's Theory of Token-Reflexives and Kaplan's Theory of Direct Reference: the former requires semantical conventions specific to the indexical expressions, and the latter inquires a comprehensive convention common to indexical and non-indexical expressions.

Although Kaplan's type-oriented theory has been regarded as solving some serious problems implicated by Reichenbach's token-oriented theory, it is confronted with another problem with so-called "true demonstratives", which requires non-linguistic demonstration to fix the referent.

Of course the token-oriented theories have also some difficulties as seen in the Reichenbach's or D. H. Mellor's. It seems to me that this problem shows a serious and ingrained dilemma between type-oriented semantical theory and token-oriented theory; between a pure semantical theory and a hybrid theory containing extra-linguistic entities in it.

* 慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程（哲学） E-mail: geistus@gol.com

トークン再帰性** は、Frege 流の記述的意味論体系の中で指標表現を扱うために H. Reichenbach が導入した概念である。これは、発話されたトークンの指示や真理条件の決定方法といった意味論的機能が、トークン自体が持つ諸性質に依存するという主張である。他方、D. Kaplan は指標表現を扱う直接指示理論を構築するにあたって、Reichenbach の方法が含む問題点を指摘し、ある技術的な手法を用いることでこれを克服しようとした。その手法とは、本来言語外の対象である表現トークンを、文におけるその表現の「現れ」として抽象化し、一種のタイプとして体系内に取り込むというものであった。またここから派生する特徴として、前者が指標表現に固有の意味論的規約を必要とするのに対し、後者はあらゆる表現に一貫した規約を適用するという違いもある。

Kaplan の手法は Reichenbach の方法が指標詞に対して被ることになる困難を解消するために考案されたものであるが、実際には、直示語を扱う場合には重大な問題を抱えることになる。Kaplan にとって、同じ脈絡内で指標詞が同じ意味性格を持つ場合には意味内容も同じでなければならないが、こと指示対象の決定に直示を伴う場合に、実際にはこの原則が成立しなくなるようなある種の文脈が存在する。これは、トークン再帰理論が「私」「今」のようないわゆる純粹指標詞を扱えなかったのと同様に、直接指示意味論が「これ」「あれ」のような直示語を一貫した手法で扱い得ないということである。

他方、D. H. Mellor は無時制的意味論を提示するためにトークン再帰理論を利用したが、彼の意図は、時制的指標詞を含む文の真理条件が無時制的に表現できることを示すことにある。しかし真理条件の決定方法をトー

** “token-reflexivity” は、それが名辞の指示対象であるトークンを反射的に決定するという Reichenbach の意図に従えば「トークン反射性」と訳すべきだが、ここでは D. H. Mellor の用法をも視野に入れる目的と、その「反射」が必ずしも即座に・直接的に行われるとは考えにくいという意図から、敢えて「トークン再帰性」と訳している。

クンに結び付けているという点で、首尾一貫した意味論体系の構築は望めないように思える。この問題は、表現の意味論的機能をタイプ志向に保つことで首尾一貫した指示の理論を求めるか、トークン志向の言わばハイブリッドな理論に傾いて一貫性を捨てるかという根深い二律背反を示しているように思える。

なお本稿では、直接指示理論との対比を表すため、Reichenbach と Mellor の主張を総称してトークン再帰説 (theory of token-reflexives) と呼ぶことにする。また用語の混乱を避けるため、Kaplan に従って指標詞 (indexicals) を、「私」「今」「ここ」等の純粹指標詞 (pure indexicals) と、「これ」「あれ」等の直示語 (demonstratives) または真正な直示語 (true demonstratives) とに区別する。更に指標詞と、「あの人」等の複合的な表現を含めて一般に指標表現 (indexical expressions) と呼ぶことにする。

1. トークン再帰説

Reichenbach が指標表現を扱う¹ 特徴のひとつは、それが名辞を扱う Frege 流の手法の延長線上にあることだろう。つまり彼は指標表現を、個体を指示する記述のうちのある種のクラスとして位置付けている。後にも述べるが、Kaplan による批判の要点は、直接的にはこの特徴に対して向けられたものである。

更に、いまひとつの重要な特徴として、表現のタイプとトークンとの区別を行った上で、指標表現がトークン再帰的 (token-reflexive) であることが強調されている²。トークン再帰性とは、ある表現タイプのトークンがそのトークン自体にはね返る、つまりそのトークンの指示や真理条件の決定が、トークン自体が持つ因果的・物理的性質に従って決定されるとい

¹ Reichenbach [1947], pp. 284–287.

² Reichenbach は “symbol” と呼んでいるが、これは一般に “token” に対置される “type” を示すと考えて差し支えない。

う特徴である。例えば私が「私」と言った場合、「私」という表現トークンは、私がそれを発話したという因果的性質を持つ。あるいは「今」「ここ」と言えば、その指示対象は、その表現トークンが実際に占めている時間や場所そのものである³。

このような考え方に従えば、指示対象や真理値の決定に関わる意味論的機能を担うのは、一定の時間や場所を占める物理的な表現トークンであって、タイプではない。指標表現が、同じように個体を指示する名辞として固有名と異なるのは、それが使用された脈絡 (context) に応じて指示対象が異なり、そこからその表現を含む文全体の真理条件も異なるという点である。例えば固有名の場合には、予め決められた指示対象を持つ名前のタイプがあり、名前とそれを担う対象との間の関係は、その名前が実際に使われる際の話者や時間や場所に応じて変わることはない。これに対して「私」のような指標表現は、私が使えば私を指し、誰か他の人物が使えばその人物を指す。この特徴を反映するため、指標表現の指示をその表現トークンに帰属させる、というのが Reichenbach の取った方法である。

尤も日常的な場面においては、脈絡に応じて同じ固有名の指示対象が異なることは頻繁にあり、その意味で指示対象の決定を表現トークンに帰属させることは指標表現に限ったことではないかもしれない。しかし固有名の場合には、その決定に使われる意味論的規約 (convention) はその表現のタイプに指示対象を割り当てる筈であり⁴、指示をトークンに帰属させ

³ 但し、言葉のトークンが持つ性質を「物理的」と呼んで良いかどうかは疑問である。個々の発話について我々が参照する時点（「2000年10月12日」等）や場所（「東京」等）といった要素は、多分に規約的であり、抑も言語に基づくものであるかもしれない。この意味で、トークン再帰説は論点先取に陥る危険性がある。

⁴ 例えば星野という名前の人物が複数存在すると、「星野」は私がいる脈絡では筆者を指すが、別の脈絡では別の人物を指す可能性がある。しかしこの場合、「星野^{type}は α を指示する」「星野^{type}は β を指示する」等々という複数の規約が存在するだけで、談話の領域 (domain of discourse) が確定されれば、星野^{token}は脈絡に依存せず一意にある人物を指示する筈である。指標表現の特徴は、上のような規約に含まれるべき表現タイプが存在しないことである。

ることは、そのような規約の例化 (instantiation) として理解されるだろう。というのも、言語表現と対象とを結び付ける意味論的規約は、それが規約である以上は任意の文脈で繰り返し利用可能でなければならないので、そこに現れる表現はタイプでなければならないからである。しかし指標表現に関しては、意味論的規約が一意の指示対象を割り当てるような表現タイプは存在しない。これがトークン再帰説の要点であり、意味論的機能を表現トークンに帰属させるのは、その表現に指標表現が含まれる場合に限られることになる。但し、指標表現がトークン再帰的であっても、言語表現である以上は何らかの規約に従わなければ繰り返し利用できない。そこで指標表現に関しては特別に、その表現のトークンが持つ物理的・因果的性質に従って意味論的性質を決定する、という規約を考える必要が出てくる⁵。

ところで、Reichenbach の説明が Frege 流の手法の延長線上にあるという最初の特徴に倣い、彼は例えば「私」は「このトークンを発話した人物」という確定記述に置換え可能であると論じている。この点に関する問題点は後に述べるが、彼はこれと同様に、名前は個体記述 (individual-descriptions) によって置換え可能であると考えており、名辞（名前や指標表現を含む）から記述への置換可能性が保証される限りでは、指標表現のトークン再帰性による脈絡可感性 (context sensitivity) に対する説明には影響はない。つまり、Reichenbach が Frege 流の手法を採用しているという言わば記述志向的な特徴と、表現の意味論的機能をトークンに帰属させるというトークン再帰的な特徴とは、独立であると思われる。

2. 直接指示理論

上に述べたように、Reichenbach は、指標表現と記述とが置換え可能

⁵ 但し Reichenbach は、動詞の活用既に話者や時制に関する制約が含まれていることから、ほとんどすべての文が指標表現を含むと考えている。

であり、同義であると断じている。Kaplan が批判を行うのはこの点である。例えば私が坂本という人物を指差しながら、「彼は私の指差している男性だ」と発話するとき、私が表現したい命題（私の発話の内容）を考えてみよう。私の意図は、恐らくその人物の名が坂本であることを伝達しようという点にある。しかし他方で、同じ発話を単なるトートロジーと読むこともできる。この場合、この命題は「私の指差している男性は私の指差している男性だ」という置換えが行える。これは事物様相 (*de re*) と言表様相 (*de dicto*) の2つの読みを示す典型的な例だが、Kaplan の要点は、記述によって指示対象を指定 (fix) することと、同義語を与えることとの違いである。言表様相の読みにおいても「私の指差している男性」という記述は確かに「彼」の指示対象を与えはするが、私は誤って別の人物を指差しているかもしれないので、これは必然的に正しい命題とはならず、従ってこれら2つの表現は同義ではない。しかし、指標詞を記述で置き換えることが可能だと考えるなら、事象様相の読みを扱うことはできないのである。

こうした議論を踏まえた上で、Kaplan の批判は Reichenbach の次のような考え方に対して向けられる。

……語や文は記号 (symbol) [タイプ] である。問題の語 [「私」「あなた」「ここ」「今」「これ」等] は、話し、あるいは書くという個々の行為において用いられる、当該のトークンを指示する。それ故に、これらをトークン再帰語と呼ぶのである。

こうした語をすべて、「このトークン」という句によって定義できることは容易に見て取れる。例えば「私」は「このトークンを発話している人物」と同じ意味であり、「今」は「このトークンが発話された時間」、「このテーブル」は「このトークンに伴って指し示されたテーブル」と同じ意味である。従って我々は、「このトークン」という句の意味を調べるだけでよい⁶。

⁶ *Ibid.*, p. 284.

もし「私」が「このトークンを発話している人物」と同じ意味、つまり同義だと言うなら、「私はこのトークンを話している人物である」という発話が恐らく正しいことから、「このトークンを話している人物が存在しないなら、私は存在しない」ということも正しい。トークン再帰性という概念はこのような不都合な結論をもたらすというのが Kaplan の批判である。つまり Reichenbach の「「私」は「このトークンを発話している人物」である」という定義は、定義項に含まれる「このトークン」という指標表現が実際にはトークンではないため特定の指標を持たず、指示対象を決定できない。「このトークン」は指標表現ではなく、同じ表現の単なる前方参照的 (anaphoric) 用法にすぎない⁷。

さて、指標表現をめぐって展開される議論の中で、Kaplan はその脈絡可感性を扱うため、文の真理値を評価する方法を次のように二段階に分けて行おうとする。

使用脈絡 (context of use):

表現が使用される (発話が行われる) 際の指標

評価状況 (circumstance of evaluation):

命題の真理値が評価される際の指標

更にこれに応じて、表現の「意味」も次のように分割される。

意味性格 (character):

使用脈絡に応じて、表現の意味内容を決定する関数

意味内容 (content):

評価状況に応じて、表現の外延を決定する関数

⁷ Kaplan [1996]. Millikan [1990] も同様の主旨で Reichenbach の定義を批判している (Millikan [1993], p. 273).

意味性格は発話中の各表現に対して、発話全体の真理値を評価する際に用いられる意味内容を、表現の使用脈絡に応じて決定する⁸。意味内容は、可能な状況や時点といった指標と相対的に、表現の指示対象を決定する。このように表現の外延は、意味性格と意味内容という二つの関数を通して、合成関数として決定されるのである。このことは、名辞の指示の定常性(stability)の基盤となっている。つまり、いかなる可能的状況において文の真偽が評価されても、問題になる名辞の指示対象は発話の脈絡(使用脈絡)における対象を指示し続ける。これに対して Frege 流の意味論に従えば、可能世界で文の真偽が評価される際に、表現の意義(Sinn)に従って各世界で指示対象が選出されることになるだろう。直接指示理論が「直接」と称する所以は、固有名、指標詞、直示語といった名辞が Frege 的な意義を介さずに直接に対象を指示するという点にある⁹。そしてそこから、名辞の意義というものを認めるにしても、それはむしろ指示対象の持つ性質によって決定されることになるだろう。

このような区別を導入すれば、上の例「彼は私の指差している男性だ」の事象様相の読みを首尾よく扱うことができる。つまり、「彼」の意味と「私の指差している男性」の意味は、前者の意味内容が定値関数であるのに対して後者はそうではないという点で、異なるのである。

ところで、上で言う文の意味内容とは言わば「表現と脈絡が結合されたもの」である。Kaplan はこれを表現の「現れ」(occurrence)または「脈絡に置かれた文」(sentence-in-a-context)と呼び、表現の発話(utterance)と明確に区別しようとしている¹⁰。なぜなら、表現の発話＝トーク

⁸ Kaplan によれば、使用脈絡は発話の世界、時点、発話主体からなる順序対である。例えば「私」は使用脈絡に含まれる話者を指すので、その意味性格は「発話主体を指す」といった規則と考えればよい。

⁹ Kaplan は指標表現を、純粹指標詞(「私」「今」「ここ」「昨日」等)と、直示語(「あれ」「そこ」等)の2つに大別している。前者とは異なり、後者の特徴は指示対象の指定に指差し等の行為が補完的に用いられることである。

¹⁰ Kaplan [1977], § XIII および Kaplan [1989], pp. 584-585.

ンはあくまで物理的対象であり、その意味で同一のトークンが同時に生じることがあり得ない。すると例えば、「P 故に P」という妥当な推論が発話される場合、前者の P と後者の P は別個のトークンであり、結果としてこの推論は真にならない可能性がある。そこで、実際に行われた発話や可能的な発話から一種の抽象化を施して、言わば発話のタイプを形成し、そのタイプを具体的な脈絡に置くことで、表現のトークンを論理的に操作可能にするという手法が用いられている。つまり Kaplan の直接指示理論は、トークンとして例化 (instantiation) された言語表現をそのまま扱うことを避けようとしている¹¹。

また、使用脈絡/評価状況、意味性格/意味内容の区別は、指標表現のみに限った意味論的性質ではなく、通常の名辞にも適用される。例えば固有名の意味は、あらゆる指標について同一の意味内容を返す定関数として扱われる。Kaplan は直示語の論理体系 LD (Logic of Demonstratives) を構築しているが、この LD は、指標詞を含まない従来の体系を部分論理として含んでいる。要するに、あらゆる表現に対して同じ意味論的規約を適用させ、首尾一貫した論理体系を構築するために、技術的な手法を用いることにより、言語表現の意味論的機能を一種の表現タイプに帰属させているのである。

3. Mellor のトークン再帰説

ここで Kaplan の手法に対する批判のひとつとして、時制理論/無時制理論 (tensed/tenseless theory) の論争に関して無時制理論的立場からトークン再帰性を主張している、D. H. Mellor の議論に目を向けてみたい¹²。

¹¹ 使用脈絡が物理的対象かどうかには別の議論を要するが、意味論の自律性という観点からは、矢張り言語的 (規約的) 対象と考える方が自然であろう。

¹² Mellor and Lucas [1998]。なお時制/無時制理論の論争の詳細に関しては Smith [1993] を参照。

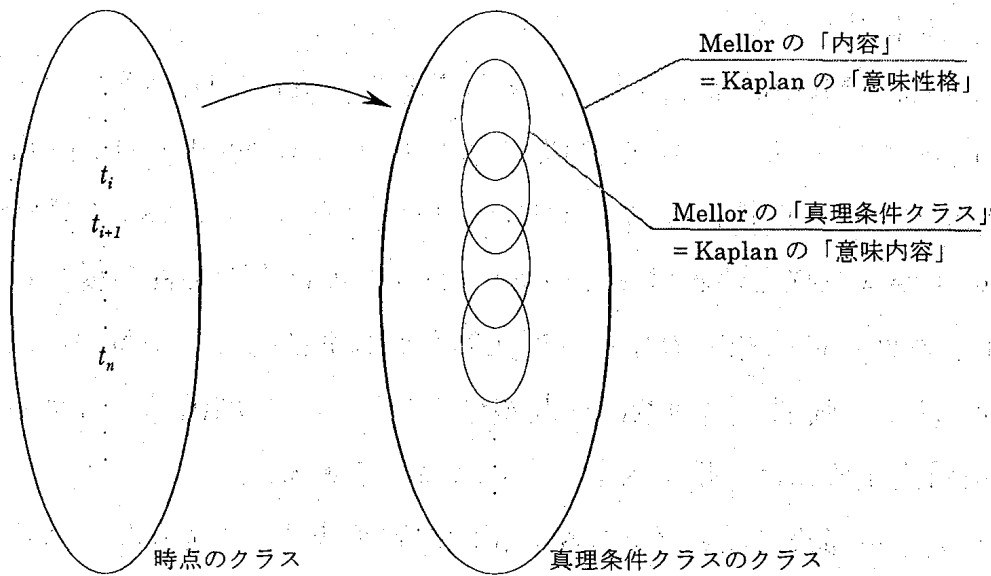
無時制論者である Mellor によると、「出来事 e が今起こる」という時制的発話 u の真理条件は、 e が起こる時点 t において e が起こることである。 u は時制的表現を含むので、対応する真理条件は時点に応じて変化しなければならない。更にこの時点に応じて変化する真理条件を使って、 u の時間的内容 (temporal content) が決定できなければならない。なぜなら、内容を決定できる形で真理条件が変化しないなら、その発話が現在の時制的発話となることはない¹³。

一般に、「任意の時制的発話の内容は、任意の無時制的時点 t から、 t における真理条件への関数によって与えられる」ということが Mellor の見解である。しかしながら、この関数が発話 u の内容を与えるとする、複数の人物が全く同じことを言っているが、それらの発話の真理値が互いに異なる場合があり得る。例えば、同じ出来事 e について、ある人はそれがある時点において今起こると言い、別の人は別の時点において今起こると言うとする。このとき「 e が現在起こる」という発話は同じものなので、共に真となる筈である。しかし実際には片方の時点にしか起こらないため、真理条件が時点に応じて与えられるとすると、一方は真で他方は偽となってしまう。

他方、Kaplan にとってはこのような困難は生じない。前述の通り彼は意味性格と意味内容との区別を行ったが、これを Mellor の議論に当てはめれば、命題の発話の時点から真理条件への関数が意味性格とされ、意味内容はその時点での真理条件と同一視されることになる。この方法だと、(意味) 内容はその時点での真理条件そのものなので、内容が同一であれば真理値も同一になる。両者の比較は上のような図で表現できる。

ところが、Kaplan の方法にはまた別の問題が生じる。まず時制論者にとっては、命題の内容は時制的真理条件 (出来事が現在であること) と

¹³ e が t において起こることが t 以降の時点で常に真なら u は「 e は過去」となる筈であるし、 t 以前の時点で常に真なら「 e は未来」となる筈である。



—Mellor による「命題内容の与えられ方」

るが、この真理条件はその出来事が生じた時点では成立しない。Kaplan に従うと個々の時点に応じて単独の真理条件クラスしか与えられないため、その出来事が生じた以外の時点では発話の真偽が問えないことになってしまう。更に無時制論者にとっては、次のような都合の悪い含意が得られる。

- 時制的発話 u は、「出来事 e が時点 t に起こる」という無時制的発話と同じ内容を持ち、
- 発話の内容は時点に応じて変化するので、
- 発話の内容を知るためには、今が何時かを知る必要がある。

これを時点ではなく、発話者に当てはめて考えてみよう。例えば「私は哲学者である」という発話の内容は、人物 x から「 x が哲学者であること」への関数によって与えられる。しかし Kaplan の方法に従ってこの関数が内容であると考え、私が哲学者であることを知るためには、私が誰であるかを正確に知る必要がある。これでは代償が余りに大きいというのが

Mellor の論点である。

ところで、Mellor は「内容」が文の主要な（真偽に関わる）意味であると述べているので、さきの図に示したように Mellor の「内容」と Kaplan の「意味性格」は同一と考えて良いだろう（Kaplan も意味性格を文の主要な意味と位置付けている）。異なるのは真理条件の扱いだが、Kaplan が個々の指標に依存した真理条件を個別に与えているのに対し、Mellor はこの個別の真理条件を問題にしていない。理由は、各々の真理条件を特定するには代償が大きいということである。

トークン再帰説に従えば、表現の指示対象を決めるためには、そのトークンを提示すればよく、それによって発話全体の真理条件も決定される。Kaplan が発話の指標と真理条件の指標、意味性格と意味内容を分離し、発話を直接扱わずにそれを抽象化したことで、個々の発話の真理条件が個別化され、指示対象の指定が却って困難になってしまうというのが上記の構図である。但し、Mellor の手法ではそれら 2 種類の指標が明確に区別されていないことから、反事実命題の発話の真理条件を扱うことには困難が伴うかもしれない。

4. 直接指示理論の問題

1 と 2 で示した通り、Kaplan は Reichenbach が指標詞を扱う困難を指摘して、指標表現一般を扱える理論の構築を目指した。ところが、Kaplan の理論は「私」「今」「ここ」といったいわゆる純粹指標詞には問題なく適用できるが、「彼」「あれ」等の直示語に関しては、ある困難な問題が生じ得る。

まず、純粹指標詞の場合と同じように直示語の理論を構築するにあたっては、次の 2 つのことが同時に満たされる必要がある¹⁴。

¹⁴ Garcia-Carpintero [1998].

- i) 同じ直示語タイプのあらゆる現れについて、共通の意味性格が与えられなければならない。
- ii) 同じ直示語タイプの異なる現れは、異なる意味内容を持つことがあり得る。

純粹指標詞について実際にそうであるように、直示語に関しても共通の意味性格がなければならない。例えば純粹指標詞「私」の意味性格は、「所与の脈絡における話者」といった形で与えられるので、その任意の使用において共通の意味性格が保証され、その結果として同一の脈絡におけるすべての現れは同じ指示対象を固定的に指示する。そうでなければ、その語を含む論理的推論は成立しないだろう。これと同様に、論理的推論を保証しようとする限り、直示語についても同一タイプには同一の意味性格が与えられる必要がある、というのが i) の要請である。つまり、もし2つの同じ直示語タイプが同じ脈絡において使用されるなら、そこからそれらの意味内容は同一であり、同じ仕方で真理条件に貢献していなければならない。

しかしながら、こと直示語に関する限り、同じタイプでありながら場合に応じて異なる仕方で真理条件への貢献を認めなければならない事例がある。例えば、ある人が林の中で同じ1本の木から伸びる2つの枝を指し、誤って「あれはニレの木で、あれはブナの木」と言い、更に間違いに気づいて、「いや違った、あれとあれは同じだ」と言ったとする。いずれの文中においても、各々2つの「あれ」は同じ脈絡において生じるので、同じ意味内容を持つ筈だが、これらの文は明らかに単なる同一性命題を表現するものではなく、「宵の明星は明けの明星である」と同じく認識的に価値がある。つまり、2つの「あれ」は異なる仕方で文の真理条件に貢献している。従って、意味内容は異なる。このような事例を扱うため、直示語に関して ii) の要請を認める必要がある。

ここで仮に、上記の i) を論理的要請、ii) を認識的要請と呼ぶことにしよう¹⁵。上の議論の要点は、論理的要請に従ってあらゆる直示語タイプが同じ意味性格を持つとすると、同じタイプが同じ脈絡において現れた場合、結果としてそれらの直示語タイプは同一の意味内容を持たなければならない。しかし認識的要請に従って上の事例のような言明に認識的価値を認めようとするれば、論理的要請と相容れないものとなる、ということである。

この論理的要請と認識的要請の拮抗は、純粹指標詞については生じないだろう。抑も、語のタイプが同じ（上の例では「あれ」）でありながら、同じ脈絡内で異なる対象を指すような事例は、指示対象の指定に際して指差しのような直示 (demonstration) を伴う直示語を含む場合に限られる。純粹指標詞の場合にはそれが現れる脈絡の中に既に指示対象が含まれているが、直示語はそうではない。しかし指標詞と直示語を同じ意味論体系の中で扱おうとする Kaplan の意図に従うなら、何らかの方法で直示語の指示対象を脈絡に関連付ける必要がある。このため Kaplan は、話者による直示の対象である直示対象 (demonstratum) は、脈絡から決定されるとした。従って恐らく上の問題は、複数の現れを持つひとつの直示語タイプに対して如何にして複数の脈絡を与えるか、ということになる。この点に関して D. Braun は、直示語を含む文に関して、それに伴う直示に従って文の脈絡が遷移するという脈絡遷移理論 (context-shifting theory) を提案している¹⁶。これは大雑把に言えば、ひとつ以上の文を含む談話 (discourse) の中で、直示語が現れる度ごとに脈絡が決定されるというものである。文に含まれる直示語タイプの文法的な現れが解釈されると、それが脈絡遷移の契機となる。そして現れの都度決定される脈絡に従って、脈絡

¹⁵ 「論理的要請」「認識的要請」は筆者の造語だが、本稿に関する限り、それぞれ「意味論的要請」「語用論的 (pragmatic) 要請」と呼んでも良い。言語の理論を構築する上で、その論理体系としての側面を保証するための要件と、言語外の制約から課せられる要件とを区別するために用いている。

¹⁶ Braun [1996] に詳述されている。

から直示対象への関数としての意味性格を与えるようにすれば、「あれ」「これ」のような直示語タイプごとに、その任意の例化について共通の意味性格を与えることができるだろう。直示語の意味性格は、例えば「その直示語（タイプ）に関連する脈絡の連鎖における各々の脈絡から直示対象への関数」といった形になる。

Kaplan の意味論体系における直示語の位置付けをこのように解釈すれば、論理的要請に従って共通の意味性格を持ちつつ、認識的要請に従って現れごとに異なる意味内容を与えることができるかもしれない。しかしながら、この解釈に伴う各々の文中における直示語の文法的な「現れ」は、Kaplan の言う「現れ」と同じ物だろうか。Kaplan が「現れ」または「脈絡に置かれた文」という抽象的な概念を導入した経緯を考えれば、恐らくこのような解釈は本末転倒である。というのも、抑も Reichenbach のトークン再帰理論で問題となっていたのは、「P 故に P」のような文に含まれる同じ表現タイプ（“P”）に対して、各々が同じ対象を指示するような共通の脈絡を与えられないことにあった。ここでもし異なる文法的現れごとに異なる脈絡を与えるなら、その「脈絡」をトークンまたはタイプのいずれに解釈するにしろ、上の命題が偽になり得ることは明白である。つまり、例えば上の P に直示語が含まれるならば、上述のものと同じ論理的要請と認識的要請の拮抗に直面することとなる¹⁷。

5. 直接指示理論とトークン再帰理論

Kaplan の直接指示の理論が純粹指標詞について論理的要請を満たしていることとは対照的に、トークン再帰理論は認識的要請を難なく満たしている。というのも、後者においては語の異なる使用＝トークンは、はじめ

¹⁷ Braun はもうひとつの選択肢として、Kaplan による意味性格/意味内容の区別に連なる第3の「意味」を「直示から意味性格への関数」として導入する方法を検討している (*ibid.*). しかしこの方法も、直示をトークンと取るかタイプと取るかに応じて前述の2つの要請のいずれかに抵触するだろう。

から異なる仕方で真理条件に貢献するため、前述の例の人物が「あれとあれは同じだ」と言うときの2つの直示語タイプ「あれ」は異なる対象を指示し得るのである。そして逆に言えば、トークン再帰理論は論理的要請を満たすことができない。

一方で Kaplan は、Reichenbach のトークン再帰理論が含む問題（論理的要請を満たせないという問題）を指摘した上で、Reichenbach の理論を修正することで、自身の理論に近付けてゆく過程を示している¹⁸。双方の理論の根本的な違いは、Reichenbach が表現の使用を「トークン」と見做してトークン概念を抽象化しようと試みたのに対し、Kaplan は表現が使用される「脈絡」を抽象化した点にある。前述の通り、Reichenbach のトークン再帰理論で問題となるのは、「P 故に P」等の論理的に真である文について、その前提部分と結論部分に現れる同じ記号（表現タイプ）に対して、共通の指示対象を与えられないことにあった。Kaplan によると、脈絡の抽象化を行わずに飽くまで表現トークンを基に抽象化を行うには、指示や真理条件決定といった意味論的機能を、表現トークンそのものではなく、トークンの「配置 (deployment)」にこそ持たせるべきであるとされる。トークンの配置とは、言わば前-存在段階のトークンであり、トークンとして実際に使用されなくとも意味論的機能を持ち得る仮想的な対象である。しかし更に、文の論理的真理を保証するためには、その文があらゆる可能的状況において評価可能でなければならない。そこでこの「配置」は更に抽象化され、「脈絡に置かれた配置 (deployment-in-a-context)」という概念に置き換えられる¹⁹。

¹⁸ Kaplan [1996], および 2000 年 10 月 20 日に慶應義塾大学にて行われた講演 “Reichenbach on Token-Reflexives.”

¹⁹ 「配置」の概念については明確に語られていないが、「脈絡に置かれた配置」は、あらゆる可能世界の中で表現の使用脈絡を限定するための、言わば現実世界パラメタとして働いているように思える。これによって固有名や指標表現の直接指示性（指示の定常性）が保証され、Reichenbach の理論は Kaplan の理論と同等になる。

つまり、論理体系においては、その中で構成された文はあらゆる可能的状況において評価可能でなければならない。しかし抑も物理的な対象であるトークンを抽象化することには困難が伴うため、Kaplan はその代わりに抽象化された「脈絡」を導入することで、トークンという概念に伴う物理的制約を免れようとしたのである。その意図は、意味論にとって「トークン」や「配置」といった「自然主義的な概念 (naturalistic notion)」は十分ではなく、恐らく何らかの規範的な概念が必要であるということだろう。これは例えば彼の次の表現にもよく現れている。

脈絡における表現の「現れ」という概念—表現と脈絡との単なる組み合わせ—は、言語行為の理論に由来する、脈絡に含まれる発話者による表現の「発話」という概念と同じものではない。現れは発話を必要としない。……論理と意味論が問題にするのは行為のような厄介ごとではなく、意味の正しさである²⁰。

しかし既に見たように、指差しのような直示を伴う直示語を扱う限り、Kaplan の指示理論は齟齬を来たすことになる。そしてこれは、直接指示理論の非トークン再帰性、つまりトークン再帰理論の基づくトークンではなく、タイプに対して意味論的機能を帰属させたことの結果である。トークン再帰理論と直接指示理論との対比を端的に示せば、表現を発話トークンとして取ると指標詞の扱いが困難になり、表現タイプとして取ると直示語の扱いが困難になる、という構図となろう。

他方 Kaplan は、「直示」を指差しのような行為ではなく、「意図」あるいは「信念」として扱う方法も検討している。しかしそれはどのようにして意味論に取り込むことができるだろうか。これらの概念は発話や現れに比べて同一性が曖昧であり、限定された指標を持つ脈絡に置くことは困難に思える。以上のことは、行為にせよ何にせよ言語外の対象を意味の理論

²⁰ Kaplan [1989], pp. 584–585.

に持ち込もうとする限り、いかなる手法を採用するにしても、それをタイプとして扱うか・トークンとして扱うか、つまり論理的に操作し易い対象として扱うか・認識的に説得力のある対象として扱うかという問題が不可避免的に生じるという悲観的な結果を示しているのかもしれない。

参 考 文 献

Almog, Joseph; Perry, John; Wettstein, Howard (eds.):

[1989] *Themes from Kaplan*, Oxford University Press.

Braun, David:

[1996] "Demonstratives and Their Linguistic Meanings", *Noûs*, Vol. 30: 2, Oxford: Blackwell, 145–173.

Garcia-Carpintero, Manuel:

[1998] "Indexicals as Token-reflexives", *Mind*, Vol. 107. 427. July, 529–563.

[2000] "A Presuppositional Account of Reference Fixing", *The Journal of Philosophy*, Vol. 97, No. 3, March, 109–147.

Hintikka, Jaakko, et al. (eds.):

[1973] *Approaches to Natural Language*, D. Reidel.

Kaplan, David:

[1973] 'Bob and Carol and Ted and Alice', in Hintikka et al. [1973].

[1977] "Demonstratives", mimeographed, UCLA, revised and reprinted in Almog et al. [1989].

[1989] "Afterthoughts", in Almog et al. [1989].

[1996] "Reichenbach's *Elements of Symbolic Logic*", mimeographed, UCLA, 1996.

Mellor, David Hugh:

[1981] *Real Time*, Cambridge: Cambridge University Press.

[1998] *Real Time II*, Cambridge: Cambridge University Press.

Mellor, D. H.; Lucas, J. R.:

[1998] "Transcendental Tense", *Proceedings of the Aristotelian Society*, Supplement Vol. 72, pp. 29–43.

Millikan, Ruth Garrett:

[1990] "The Myth of the Essential Indexical", in Millikan [1993]. (origi-

nally in *Noûs*, Vol. 24: 5, 1990, 723–734.)

[1993] *White Queen Psychology and Other Essays for Alice*, Cambridge, MA: MIT Press.

Perry, John:

[1979] “The Problem of the Essential Indexical”, *Noûs*, Vol. 13, 3–21.

Reichenbach, Hans:

[1947] *Elements of Symbolic Logic*, New York: Free Press.

Smith, Quentin:

[1993] *Language and Time*, Oxford University Press.